

戦争の思い出

徳田 千歌子

もうあんな悲しい出来事は  
二度と起こりませんように

# 目次

大阪大空襲	五
学童集団疎開	一三
兄の思い出	一九
母と扇子	二五
月ヶ瀬村への疎開	三一
終戦の日	三七
あとがき	四一



大阪大空襲

大阪大空襲

戦後七十周年。過ぎ去りし日々は、はるか彼方の出来事のように思える。戦争の時の思い出はとても恐く、そして悲しく、思い出すだけでも身震いがする。だから人に語る気もせず、黙って忘れようとしていたのだが、終戦から七十年を迎えた今、少しずつあの日の思い出を書き記し、子供や孫たちに知ってほしいと考えるようになった。あの忌まわしい戦争は、誰もが忘れてはならないことだと思うのだ。

大東亜戦争が始まったのは、昭和十六年の十二月八日、私が八歳の時だった。小学校が「国民学校」に変わり、私は大阪市内にある国民学校の三年生だった。初めは日本が優勢で、「真珠湾攻撃」とか「シンガポール陥落」とか言ってバンザイ・バンザイだった。次第に戦況が怪しくなってきた、ラジオから流れる声は「警戒報発令」とか「空襲警報」とか「敵機来襲」とかの叫びに変わっていった。敵機来襲となると、飛行機（B29）が大空いっぱいブンブンと、真っ黒なく

らい編隊を組んで襲ってくる。爆弾・焼夷弾が落とされて、見る見るうちに街は火の海と化し、追われるように道端の防空壕へと逃げ込む。空襲は夜に多く、外は真つ暗なはずなのに、燃え盛る炎や建物の焼ける色で、目の前は真つ赤だった。爆弾が怖いというよりも、もう生きた気がしない。「ガーデン」「ドドドン」「バリバリ」と、凄まじい音が響く。ある日その爆音で私の左の耳がおかしくなり、その後もずっと聞こえ難いままだった。

敵が去り「空襲警報解除」となった時は、防空壕から家に帰り、「今日も無事だったね」と母や姉たちと手を取り合って喜んだものだった。寢床に入っても何時も着の身着のまま、枕元には防空頭巾と少しの食品を入れたカバンを置いて寝た。朝起きて、何もなかったら、片手にカバン、片手に防空頭巾を持って学校へ行く。空襲のサイレンが鳴ったらすぐ家に帰り、解除になったらまた学校へ行くという毎日。これでは勉強する意欲も出てこない。明日の命も分からない状態だから。

大阪の防空壕は、コンクリートの道路に穴を掘って周りをセメントで塗り固められた、縦が約二メートル、横が約四メートル、高さ一メートル余りの狭い空間だ。その中に隣組十軒分の家族が入る。大人子供合わせて三十人くらいが、ひしめき合って、数時間の空襲に耐える。怖くて震えている人、黙って耐えている人、騒ぐ人、さまざまな人々が空襲の間、防空壕の中で生死の運命を共にした。

私は子供の頃から本が好きで、防空壕に入る時には肩から下げたカバンにいつも本を二、三冊入れていた。貧乏な家だったので、なかなか本を買ってもらえない。ほとんどはお金持ちの友達から借りたマンガや子供向けの小説だった。

防空壕に入って爆弾や焼夷弾が落ちると、あたりが真っ赤になり、その灯りでマンガが読める。マンガに熱中することで空襲の恐怖心から逃れようとしていたのだと思うが、他人の目からは「呑気な子」のように見えたらしい。

「自分は恐くなくても、人の目があるから防空壕にマンガを持って入るのはやめなさい」と姉たちから注意された。



「友達から借りた本が焼けたら困るから肌身離さず持つてるんや」と私は言い訳をした。

家に帰っても灯火管制で、電球の傘に黒い布を被せて外に灯りが漏れないようにしている。いつも暗い所ではかり本を読んでいたために、私は近視になったのだと自分では思っている。

私が国民学校六年生の時だった。忘れもしない三月十日の未明、空襲警報のサイレンで起こされ、慌てて支度をして防空壕に入った。空が真っ黒になるくらいB29の大群がブンブンと飛来している。ところが、大阪の空は通り越すだけで、何の被害もなく過ぎ去っていった。私もまわりの大人たちも、防空壕から出て空を見上げた。「B29はどこに行くのやろ」と、皆が不思議に思っていた。翌日、ラジオや新聞紙上で、東京が大空襲に遭ったことを知った。驚くことに、一晩に十万人の犠牲者が出たらしい。大阪の人々は、「ああ、東京でよかった」と、勝手な事を囁き合った。

ところがそれから一週間後に、今度は大阪が大きな爆撃に遭った。兄や姉の勤めていた軍需工場がやられた。最寄りの国鉄の駅は吹き飛び、その時は空も異様な色だった。次いで、私の家の近くへ焼夷弾が落とされた。さっきまで西の空がどす暗い赤色だったのに、今度は東の空が真っ赤に染まり、「バンバン」「ドドド」「バリバリ」と、ものすごく大きな爆弾の落ちる音、飛行機の飛び交う音、様々な音が混じり合う。もちろん、生きた心地はしない。

三時間くらいの空襲だった。その時、左の耳がツーンとなり、鼓膜が破れたと感じた。その後、国民学校が燃えていると聞いた。私は頭の中が真っ白になった。だって、耳は変になるし、三日後には私の卒業式を控えていたのだ。

翌日学校へ行ったが、まだ校舎は燃えていた。熱くて、そばまで近寄ることはできなかった。もちろん、卒業式もなくなってしまった。わんわんと泣いている友達の姿もあった。私は何が何だかわからず、茫然と立ち尽くしていた。

これからいったいどうなるのだろう。私は子供心に考えた。大人の人たちは、「今に神風が吹くから心配ない」と言っていた。「神の国、日本」みんながそう信じて疑わなかった。

「卒業式はどうなるんやろ」と、私は母に言った。母や姉からは、「卒業式なんかどうでもええやん。命があっただけでも有難いと思え！」と叱られた。幾日か経ってから、学校の運動場で形ばかりの卒業式が行われた。まだ校舎がクスクスと燃えている臭いが漂っていた。

四月に私は高等国民学校（今の中学校）へ入学した。ところが、六月二十八日の空襲で、この学校も全焼した。私はもう、勉強する意欲もなかった。以後は行く学校もなく、仕方なく父母の故郷である奈良県月ヶ瀬村に疎開した。

書き忘れていたが、敵機は爆撃機のB29だけでなく、艦載機という小型のものもあった。さーっと上空から急降下してきて、人を見つけると機関銃のようなもので狙い撃ちをする。艦載機に見つかり、恐らく助からない。何人も人が

狙われて、撃ち殺されているのを知っている。空襲の翌日には必ず真っ黒の雨がザーッと降ったものだが、あれは何だったのだろう。たくさんの飛行機が空を攪拌したためかと、私なりに思っている。

日本のように小さな国が勝てるわけがないのに、なぜ戦争なんかしたのだろう。忘れてしまいたいけど、決して忘れられない、辛く恐ろしい体験。私は今でも夜空に花火が上がるのを見ると、空襲のことを思い出して、とても嫌な気持ちになる。

学童集团疎開

学童集团疎開

学校が大空襲で焼ける一年ほど前の話。大阪は日ごとに空襲が激しくなってきたので、子供たちには縁故疎開・集団疎開が実施された。三年生から六年生までの子供たちは集団疎開だった。行く先は奈良県磯城郡田原本町の浄照寺というお寺だった。三年生から六年生まで約百二十名がお世話になった。

昼は元気な子供たちも、布団に入ると家が恋しくなり、すすり泣く声が聞こえた。一人泣くとつられて、あちらこちらで大勢が泣いていた。

田原本の町長さんは良くできた人で「疎開の子、疎開の子」と言って、とても大事に私たちを可愛がってくださいました。水原さんとおっしゃる町長さんで、今ではもう亡くなっておられるだろうが、あの御恩は一生忘れないと思っている。お風呂も、町長さんの計らいで、地元の人たちよりも先に入れてもらった。食糧の配給が少ししかなく困っているときも、必ず手配して疎開の子供たちに回して下さった。それでもお腹が空いて、私は学校へ行くのが嫌だった。

集団生活しているためか蚤や虱が大量に発生し、痒くて痒くて、お寺の隅で互いに蚤取りをした。まるで動物園のお猿のようだった。冬になっても暖房がなく、広い本堂に火鉢が二つ置いてあるだけ。手足が冷えて、ひどい霜焼けになった。夜は薄い布団にくるまって寝た。時にはおねしよをする子もいた。

食べ物がなかったので、何でも文句を言わずに食べた。お米は少しだけで、芋や菜っ葉ばかりが入った雑炊。その配給をもらうために小学生が鍋を下げて長蛇の列に並ぶ。いま思えばゾーツとする光景だ。ほんとにあの時の空腹には耐えられなかった。

ご飯が出ると寮母さんがお茶碗に一杯ずつ注いで下さり、それを五、六年生の女子が机の上に配る。そのとき、みんな分量の多そうなものを自分の机に置く。茶碗の大きさは大きさまで、本当のところ、ご飯の分量はどれが多いのかよく分からないのだ。

ある日、「五年生が分量の多いものを自分の机に置いてはる」と、六年生の私た

ちが抗議した。それが五年生担任の先生の耳に入った。

「お前たちは、一粒一粒お米の数を数えて言ってるのか！」と叱られ、罰として絶食させられた。何でなくても空腹なのに、そのときはほんとに死ぬのではないかと思った。

六年生の男子が二人、お寺から逃亡したことがあった。連れ戻された二人は脱走の理由を「腹が減って辛抱できない」と言ったそうだ。私はうなづけると思った。

トイレは三つあったが、そのうち一つは職員さんのトイレ。私たちが使うのは本堂の外にあつて、裏はお墓だった。ただでさえ怖いのに、そのトイレに幽霊が出るという話が伝わってきた。みんな怖くて夜中にトイレに行けなくなり、おもしろしをする子も増えた。先生が調べたところ、幽霊の噂はある町の人が広めたもので、「怖がらせると疎開の子は帰るかもしれない」という思いからやったらしい。きっと、私たちが田原本に居住していることが嫌だったのだろう。その時は腹



を立てたが、考えてみると町の人たちもお気の毒だったと思う。町長さんが町の人々に「色々なことを疎開の子にしてやれ」と言ったことが、負担だったのかもしれない。例えば十月のお祭りには各家庭で二人ずつの子を預かり、その日は御馳走をして、もてなさなければならぬ。お正月には一泊で家へ招いて下さった。そういうことが嫌だった人もあったのではないかと思う。

四月に疎開したのだが、私たち六年生は翌年の三月に卒業を控えていたため、二月には田原本から大阪へ帰った。そして、あの大空襲に遭い、学校が焼失してしまったのだ。

集団疎開では嫌だった思い出、苦勞した時の話など色々あるが、これまで決して人に言ったことはなかった。町の誰が悪いわけでもない。戦争さえなければ、子供が親元を離れて、そんな生活をすることもなかったのだ。

疎開中は、水原町長さんを始め、お寺の住職さん、また町の人々も皆よくして下さいました。いま思えば、大阪から大勢の子供たちが押しかけて来て、さぞかし迷

惑だったと思う。本当に心から感謝している。終戦後、一度お礼に伺いたいと思  
いながら、未だ果たせておらず心残りだ。

水原町長さん、町の皆さん、ほんとにありがとうございました。

兄の思い出

兄の思い出

戦死した私の兄、脇野富美男のことを少し書いておこうと思う。

兄は奈良県月ヶ瀬村で生まれた。家族と共に大阪へ転出して、学校を卒業後、陸軍造兵局に勤務する。温厚にて明朗な、優しい心の持ち主だった。私より十二歳年上で、年が離れていたためか、末っ子の私をよく可愛がってくれた。友達にも厚く、誰にでも好かれる人だった。

兄は本当に優しくかった。自分の小遣いもあまりないのに、本好きの私のために、道端に出る夜店の古本屋で本を買ってくれたことを覚えている。講談社の「孝女白菊」だった。ずっと大切にしていたのだが、いつ失くしてしまったのだろう。

また、夏には近所の子供たちを集めて、花火をしたり、床几の上で怪談や面白い話をしてくれた。ありきたりの昔話だけでなく、兄が自分で創作した話もたくさんあった。今でもその筋書きや兄の語り口調まで、よく覚えている。私ばかりでなく、近所の子供たちも「兄ちゃん、また話をして」と兄にせがんだ。

そんな兄を若くして亡くしてしまったことが、本当に残念でならない。

兄は二十一歳で出征して、三月二十一日に奈良の連隊に入り、中支、マライ、ビルマと転属した。最後は、

「ビルマ、タヨンゼで豪雨に遭い、衣服は腐敗し、軍靴は破れ、食べる物もなく、草根、木皮を齧り、飢えを凌げど、時には毒草により意識不明となり、口腔の痺れ、辛苦難も挑して戦えど、乾く間も無き衣服に皮膚は爛れ、身体は腫れ、遂に死す」

この事実は、同じ月ヶ瀬村の軍曹からの便りで知った。

昭和二十年、兄の遺骨を母と姉と、当時月ヶ瀬村で疎開していたので村長さんとたちと八人で奈良まで迎えに行った。そのとき私は十三歳だった。

白い布に包まれた四角い小さな箱。それを見た瞬間、ここに兄が入っていると見えなかった。兄は人より身長が高く、「電柱」というあだ名が付いていたほどだ。こんな小さな箱に入るはずがない。私は涙のひとつもこぼれなかった。帰宅

してから遺骨を安置するときに、母がそつと箱を開けて、姉たちと一緒に中を覗いてみた。

何ひとつ入ってなかった。小さな紙切れに「脇野富美男　ビルマ、タヨンゼにて　八月三十日　戦病死」と、たったそれだけ書かれていた。母、姉たち、私、誰一人泣くものはなかった。

兄を亡くしてから七十年以上が過ぎ去った今も、私の心の中には兄を忘れることができない。あまり人に話したこともない。思い出すのが辛いだけだ。

私の孫（娘、悦子の子）の中野陽太は、戦死した兄に似ている。顔も似ているし、性格もよく似ている。だから私は陽太をことさら可愛く思うし、その反面、見るのが辛い時もある。

兄の戦死した当時、世間にはそんなお気の毒な家庭がいっぱいあった。しかし、皆「お国のため」と言って、口に出して悲しむ人はなかった。

この戦争の犠牲者はそれだけではない。広島、長崎の原爆、東京、大阪での大

空襲、死者は数え切れない。「戦争反対！」と叫ぶまでもなく、叫ばなくても反対に決まっている。

姉、美代子の生存中は、八月三十日の兄の命日に、京都七条の靈山観音へよくお参りをした。そこにはたくさんの方の戦没者がお祀りされている。私たちが参拝すると「蒼明院翔野義富居士」と記した兄の戒名を出して来て下さる。私は心から拝んだものだった。姉の死後は一人で行く気にもならず、せめて月ヶ瀬の軍人墓でもと思うが、足が痛くてそれもままならない。

近日は毎夜、寢床につく前に「般若心経」を唱えてから休むことにしている。自分よりも先に亡くなった人たちのために。父母、姉たち、そして夫も、病気で亡くなったのだから仕方ない。でも兄は二十三歳の若さで、国の犠牲者となってしまったのだ。私の憤りは止むことがない。

兄の思い出



母と扇子

母  
と  
扇  
子

私の母は立派な、強い人だったと思う。

母は二十歳で長姉を産み、四十歳で末っ子の私を産んだ。四十四歳にして夫を亡くし、子供は五人。どうして生活できたのかと不思議に思う。今のように福祉が充実していたわけでもないのに、母の泣き言は聞いたことがない。

私も母のような人になりたいと常々思っていたのだが、とうてい足許にも及ばない。

もしここで戦争でも起きたら、私は生きていく気力も失ってしまうだろうし、孫二人の兵隊さん姿なぞ決して見たくない。涙を隠して「バンザイ、バンザイ」と戦場へ送り出すことなんて、絶対に出来ないだろう。

母はどんな時も人に頼ることなく、あの辛かった戦時中でさえ気丈に振る舞っていた。人を頼りにしなければ生きていけない自分が情けない。今日まで私を支えてくれた子供たちと、ケアハウスの北川チーフ、山下看護師には、ほんとに感

謝の気持ちでいっぱいだ。兵隊さんは死ぬ時「天皇陛下万歳」と言ったそうだが、私は心を込めて「ありがとう」とお礼を言ってから死にたい。

さて、少し話が逸れたが、私にはまだ誰にも話したことの無い秘密がある。知っているのは母と私だけ。死ぬまで言うまいと思っていたが、一人胸の奥にしまっておくのもしんどいので、思い切って書くことにする。

あれは昭和十七年の夏のこと。私は小学校の三年生だった。奈良の連隊へ入隊した兄は、筆まめに母へ軍事郵便を送ってきた。ある日、私が学校から帰ると、一枚の葉書がポストに入っていた。

「○○日の××時に自分は奈良から中支に配属します。もう二度とお逢い出来ないと思います。この時間までは面会できますから、国鉄奈良駅の○番線乗り場まで来てください」と書いてあった。私は急いで母に知らせなくてはいけないのかなと思いつつ、「まあいいか。母が帰って来てからでも間に合うだろう」と安易な気持ちで、その葉書を母の職場まで持って行かず、家に放置した。友達と校門

で会って遊ぶ約束がしてあったのだ。

仕事から帰った母は葉書を見て驚いた。「今から行って間に合うだろうか」と慌てて支度をする母の様子から、私は初めて事の重大さを知った。大急ぎで母が出て行った後、私は「どうか間に合いますように」と、心の中で神仏に祈り続けた。自分の怠慢さをしみじみと嘆いた。

何時間かして、母は淋しそうな顔で帰ってきた。私は必死の思いで「兄ちゃんに逢えた？」と聞いた。母は一言「逢えた」と言ったきり、何も言わなかった。私は「ごめんなさい」と謝るつもりだったのに、母の姿を見ていると声を掛けることができなかつた。母は私を叱りもせず、ずっと無言だった。私は大きな声で叱られるほうが助かったのに、と思った。泣きもできず、ほんとに苦しい気持ちだった。ようやく母が話してくれた。

母が奈良駅に着くと、面会の時間は過ぎていたが、ホームには汽車が停まって

いて、兵隊さんの乗った列車は見送りの家族で一杯だった。その中を掻き分け、掻き分け、列車の窓の下を走りながら「富美男、富美男！」と叫んで探した。汽車はゆっくりと動きかけていた。

「ああ、お母さん！」と叫ぶ兄の声が聞こえた。汽車は少しずつではあるが動いているし、もう何も話せなかった。兄が「お母さん、何か形見になるような物を！」と言ったが、財布以外は何も持つてなかったので、着物の帯に挟んだ扇子を列車の窓から投げ込んだ。

「富美男は上手く受け取ったかな」と母は心配そうに話した。

母が兄を見たのは、それが最後だ。「もう少し早かったら」と、母も兄も思っていただろう。幼い私にはまだ罪の深さが分からなかったが、成長するにしたがつて、後悔の念が重くのしかかるようになった。遺骨が帰ってきた時、もしかして扇子は入ってないかと、心から願ったものだった。

母は死ぬまでそのことを口にせず、三人の姉たちは誰も知らないままだ。七十

四年経った今も、私にとっては決して忘れられない悲しい思い出となっている。

お母さん、兄ちゃん、ほんとにごめんなさい。私が早く母の職場へ葉書を持っていくべきでした。

月ヶ瀬村への疎開

月  
ヶ  
瀬  
村  
へ  
の  
疎  
開

空襲で学校が焼け、行くところがなくなってしまったので、私は父母の故郷である奈良県月ヶ瀬村へ疎開することになった。

長姉は結婚していて、三歳になる男の子があつた。夫は兵隊に行っていたので、姉と、その子供と、母と私の四人で疎開した。他二人の姉は、学校から挺身隊で軍需工場へ行っていたため、大阪に残った。亡くなった父は一人っ子だったので田舎に肉親がなく、私たちは母の実家へ身を寄せた。

母の実家の藁小屋を改装してもらい、六畳二間と二畳の台所が出来た。そこに四人で住んだ。電気も水道も風呂もなかった。トイレは外に作ってもらった。畳は藁を敷きつめた上に上敷を被せただけのもので、下から風が入って寒かった。電気がないので、夜はランプの灯りで過ごした。毎日ランプのホヤを拭くのが私の仕事だった。藁小屋を改造した家は、ほんとに見すばらしかった。

水は、実家の井戸水を汲みに行った。私たちの住居から三百メートルくらい離



れていた。風呂は、もらい風呂。母の実家の伯父と叔母には何かにつけお世話になった。親戚のご厚意で、少しながら田畑も貸していただいた。

私は学校へ行ったが授業はあまりなく、農繁期には遺族家の手伝いで、田植えや草刈り、稲刈りなどの労働をした。友達はみな慣れたもので、手さばきも上手だったが、大阪育ちの私は下手で人よりも作業が遅く、すぐに疲れて迷惑を掛けた。それでも友達はみんなよくしてくれて、私の家を貧乏だと笑う人もなく、下校の長い道を楽しく笑いながら帰宅した。

終戦後すぐ大阪へ帰るつもりだったが、大阪は食糧難で大変だという姉たちの話を聞いて、しばらく田舎に留まることにした。植えてあった芋や麦などの作物が出来てきたので、それらを食べて飢えをしのいだ。

そのうち長姉の夫が復員してきたが、アメンバー赤痢の菌をもらって来て、すぐに亡くなってしまった。そのとき、姉は三十四歳で子供は四歳。姉はその数年

後に再婚して、私と母の二人になった。

結局、月ヶ瀬村には十年間住んでいた。私はここで夜学に行き、成人教育も受けた。二十歳を過ぎ、そろそろ友達も婚約とか結婚とか言い出すようになった。私は、こんな藁小屋に住んでいるようでは誰も貰い手がないだろうと思っていた。それを察した母が「大阪へ帰ろ。もう大阪でも食べて行けるやろ」と言い、私と母は大阪の姉たちの所へ戻った。私が二十一歳の春だった。

私はこうして戦中戦後を田舎で過ごしてきたが、大阪に残っていた姉二人は終戦後も大変な苦労をしたらしい。とにかく食べる物がない。道端には闇市が立ち、たくさん物資が並んでいるのだが、それを買うお金がない。だから姉たちは買出しのために農家を訪れ、米や芋を買って飢えをしのぎ、時には残りを闇市へ売りに行くこともあったと言う。

しかし、そんなことは禁じられていたので、警察に見つかれば取り上げになる。

それでも食べていくために姉たちは買い出しに出掛けた。大阪の駅のホームは人がいっぱい、ぎゅうぎゅう詰め。列車の窓から降り降りしたらしい。

「あんたはええやん。買い出しにも行かず、お母さんと暮らして」と、姉たちからよく言われた。

月ヶ瀬村にも、たくさんの方が買い出しに来ていた。みんな大きなりュックを背負い、さらに両手に持てるだけの荷物を持って帰った。ある人は、警察に見つからないようにと、お腹にお米を巻いて帰った。毎日そうしているうちに、お腹が冷えて病気になったという話を聞いた。

現在では食べ物が増えるようにあり、飢えで困ることなんて考えられない。こんな豊かな時代を迎えるとは想像も出来なかった。戦後、日本は急速に復興し、今に至っているが、それは数多くの犠牲の上に成り立っているということを忘れてはいけない。

あのときの苦勞を思い出し、お世話になった方々や、犠牲とられた方々への感謝の気持ちを大切にしながら、余生を過ごしていきたいと考えている。

終戦の日

終  
戦  
の  
日

終戦の日のことは、よく覚えている。

昭和二十年八月十五日。疎開先の月ヶ瀬で、その日、私は友達の家に行った。友達のお父さんが「千歌ちゃん、戦争終わったで」と言われた。

「どっちが勝ったん？」と、私は、とぼけたことを言った。

「敗けた。日本が敗けたんや」と、友達のお父さんが言われた。

その時、涙がこぼれた。今までの苦勞はいったい何だったのか。

思わず、友と一緒に「東條英機の馬鹿野郎！」と叫んだ。東條英機は当時の総理大臣で、戦争の張本人と聞いている。この人のせいで私の学校は焼け、兄は戦死し、家族はみんな苦勞している。日本中、そんな可哀想な家族でいっぱいだ。空襲でたくさんの人が亡くなり、街は焼け野原。広島と長崎には原爆が落とされた。すべて戦争のせいだ。

神風が吹くなんて嘘だった。みんな騙されていた。お国のためにと死んでいっ

た人たち。みんな、ほんとはもっと生きていたかったのに違いない。空しくて、悔しくて、頭の中が真っ白になった。

涙をぬぐい、空を見上げると、真っ赤な太陽がさんさんと照り付けていた。暑い暑い夏休みの午後だった。

終戦の日



あとがき

あとがき



空襲のこと、集団疎開のこと、戦死した兄のこと・・・、良い思い出は何もない。嫌なことは人に言うべきではないと固く口を閉ざしていたのだが、戦後七十年を迎えた今日、八十二歳と九か月にして、筆を取ろうと思ひ立った。

もはや、口を閉ざし、目を背けている時ではない。だんだんと体験者が少なくなってきた今日、自分の記憶がはっきりしているうちに、戦争の思い出を若い人たちに語っておきたい。戦争の悲惨さを次の世代に語り継ぐことが、何より大切な使命だと考えて、このように拙い文章を記した。

自分の子や孫たちが、二度とあのような無残な体験をしませんように。今の平和がいつまでも続きますようにと、祈らずにはいられない。

平成二十八年一月

徳田千歌子